

浜中町 町内の 地名由来

大地の恵みと海の恵みが混ざり合い、人々に豊かな恩恵をもたらす浜中町。珍しい地名の数々を紐解いていくと自然やアイヌ語にちなんだ物語が隠れています。

浜中(はまなか)

現在の榊町から暮帰別にかけての海岸をアイヌ語で「オタノシケ(砂浜の真ん中の意)」と呼んでいたことに由来しています。

茶内(ちやない)

アイヌ語でノコベリベツ川の上流を「イチヤン・ナイ」と発音したことにともづくと言われています。「ナイ」の意味は鮭の産卵場のある川。

榊町(さかきまち)

アシリコタン(アイヌ語で新しい集落の意)の名で呼ばれたのち、漁場持として榊富右衛門が道路や干場を拓き、漁民を集めたことから、榊町と命名。



霧多布(きりたつぷ)

霧が多い場所が名前の由来であるように思われていますが、本来はアイヌの人々が芦を刈る場所としての呼び名「キイタブ」が語源。

暮帰別(ぼきべつ)

アイヌ語の「ポッキベツ」、「ホッキベツ」の発音に由来し、ホッキ貝のいる川という説からこの名が付いたのではと考えられています。

琵琶瀬(びわせ)

ピバセイ川に由来すると言われています。ピバセイはアイヌ語で「カラス貝の殻を意味し、カラス貝が多く生息していることから名が付いたと考えられています。

嶮暮帰(けんぼつき)

アイヌ語でハルニレ(アカダモ)の下を意味する「ケネポク」からその名が付いたと言われています。



散布(ちりつぷ)

「チュルプ(あさりの意)」、「チルツプ(我らの掘り出すもの)の意」というアイヌ語が由来とされています。

後静(しりしず)

「シリ・シュツ(山の根本の意)」というアイヌ語の発音に漢字を当てはめたもの。

幌戸(ほろと)

魚が豊富に獲れた大きな沼をアイヌの人々が「ポロト」と呼んだことに由来。「ポロト」には、とても大切な沼という意味が込められています。

嶮暮帰



熊牛(くまうし)

アイヌ語で「クマ」は乾物干し、ウシは「多いこと」。当時、鮭を乾燥させ、保存食にする加工場がこの地に多かつたことからこの名が付いたと考えられています。



奔幌戸(ほんほろと)

アイヌ語では「ボン・ポロト」。直訳すれば「小さなとても大切な沼」となりますが、これは前述のポロトに比べ、少しだけ魚が獲れる沼というのが正しい解釈になります。

羨古丹(うらやこたん)

アイヌ語で「ウラヤ・コタン(築イナ)・網の集落の意」に漢字を当てはめたもの。築網は漁具を表し、漁民で栄えた地区であることが伺えます。

赤泊(あかどまり)

アイヌ語の「ワッカトマリ」が由来。「ワッカ」は飲料水、「トマリ」は入江を表しています。良質な飲料水がこの場所で採取できたことが推察できます。

仙鳳趾(せんぼうじ)

「チェブ・オチ(小魚が多く居る所の意)」というアイヌ語になまりが生じて、「せんぼうじ」となったと言われています。釧路町の仙鳳趾は同じ漢字ですが「せんぼうし」と発音します。

賞人(もうらいと)

賞人の地名にはアイヌ語の「ポロチェブモイ(魚が多い入江の意)」が語源となった説と、「モライト(静かな海の意)」が由来ではないかという二つの説があります。

恵茶人(えさしと)

地名の由来には多数の説がありますが、山が砂浜にせり出す様子を頭にたとえ、海へと注ぐ川または沼が近場にあった様子を表したアイヌ語「エチャシト」が語源ではないかと言われています。

姉別(あねべつ)

アネベツはアイヌ語で細い川の意味。現在の姉別川に由来するもので、江戸時代はアンネベツとかな表記で書かれています。

